

「ヤイロの娘と主イエスの服に触れた女」

2022年01月05日

イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの衣に触れた。「せめて、この方の衣にでも触れれば治していただける」と思ったからである。すると、すぐに出血が止まり、病苦から解放されたことをその身に感じた。(マルコ福音書5章27節～29節)

そして、子どもの手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。少女はすぐに起き上がって歩き出した。十二歳にもなっていたからである。それを見るや、人々は卒倒するほど驚いた。(マルコ福音書5章41節～42節)

主イエスが舟に乗って、向こう岸に渡られると、いつものように大勢の群衆が押し寄せてきた。主イエスはガリラヤ湖のほとりに立っておられ、そこへ、会堂長のヤイロが来て、足元にひれ伏し、「私の幼い娘が死にそうです。どうか、お出でになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かるでしょう」と懇願した。主イエスはヤイロの懇願を聞き入れ、彼の家に向かった。大勢の群衆も、主イエスとヤイロについて行った。

主イエスに癒しを求める光景は、いつも見られたことであつたが、この場面は、いつもとは違っていた。主イエスが癒しを与えたのは、名もない庶民であつたので、ほとんど名前が記されていない。娘の癒しを求めた父の名はヤイロであると記されている。名が記されたのは、彼が会堂長という要職にあつたからである。会堂長は、町や村に立てられた会堂(シナゴグ)で行われる宗教儀式、住民の宗教教育の全てを取り仕切る人で、住民から尊敬を集めていた名士である。ヤイロは、安息日に持たれる礼拝の聖書(旧約聖書)朗読、祈り、賛美、そして、ファリサイ派の律法学者の聖書講解などを司っていた。だから、彼は律法学者たちと親しい関係にあつた。その律法学者たちは、主イエスに対し、律法を守らず、体制を壊す者として命を奪おうと敵対視していた。会堂司ヤイロは、娘が死の病を負った時、日頃から親しい関係にあつた律法学者に助けを求めず、敵対関係にあつた主イエスに癒しを求めた。彼は、律法学者は何の助けもしてくれないと見定め、病人を癒やす主イエスに走り、額を地面にこすりつけるほどの必死な形相で懇願したのである。敵対する側にいるヤイロが主イエスに懇願し、主イエスはそれに応えられた。民衆は、どうなることかと、興味津々、押し合いへし合いしながら、二人の後を追った。その途中、別の出来事が起こった。福音書の中で、一つの出来事の中に、もう一つの出来事が挿入されているのはここだけで、緊迫感のある記述である。

この村に、12年間も出血の止まらない、婦人病に苦しむ女がいた。多くの医者からひどい目に遭わされ、全財産を使い果たしたが、回復が得られず、ますます悪くなる一方であつた。彼女の上ののしかかった苦難は幾重にも重なる。まず、身体的な苦勞である。出血が止まらないので、体はだるく、激しい仕事はできない状態であつただろう。財産も使い果たし、経済的にも行き詰まっていた。婦人病だから、結婚できない。当時女性は、15～16歳くらいで結婚していた。12年も患っていたので、とっくに結婚適齢期を過ぎ、独り者の孤独を抱えていた。また、婦人病だから、恥ずかしくて、人に苦しみを打ち明けて話すことができない。更に、イスラエルでは女性の出血は「汚れ」と見なされた。レビ記15章25節に、「女が月経でもないのに、幾日も血の漏出があり、月経が済んでも漏出するなら、その漏出の汚れの間は月経と同じように汚れる。彼女は汚れている」と規定している。身

体的、社会的、宗教的にも、出口の見えない重い苦しみを負わされていた。彼女は、主イエスは病を癒されると聞いて、群衆の中に紛れ込み、「せめて、この方の衣にでも触れれば治していただける」と信じ、後ろから近づき、主イエスの衣に触れた。恥ずかしい病であるから、言葉には出せない。後ろからそっと主イエスの衣に触れた。主イエスに寄り頼



長血の女の癒やし

んだ一途な信仰である。「すると、すぐに出血は止まり、病苦から解放されたことをその身に感じた。」彼女は癒やされたのである。主イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気付いて、群衆の方を振り返り、「私の衣に触れたのは誰か」と問われた。弟子たちは、群衆が押し迫っているのに、誰が衣に触れたかと言われも、誰であるか分かるはずがありませんと答えた。しかし、主イエスは触れた人

を見つけようと辺りを見回された。彼女は自分の身に起こった癒しと、主イエスが捜しておられることを知って、恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、全てのことをありのままに話した。主イエスは、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。病苦から解放されて、達者でいなさい」と声をかけられた。言葉にも出せず、ひたすら祈りをこめて、指先でそっと衣に触れた密かな行動を顧みられ、癒しの力に与った。そして、慰めに満ちた優しい言葉をいただき、彼女はどれほど嬉しかったことであるか。

主イエスが彼女と話している時、会堂長の家から、「お嬢さんは、亡くなりました。もう、先生を煩わすには及びません」という、娘の死亡を伝える知らせが届いた。会堂長は、出血の止まらない女のために時間が取られ、間に合わなかったと茫然自失となったであろう。彼女への怒りも湧いたのではないか。すると、主イエスは会堂長に、「恐れることはない。ただ、信じなさい」と言われた。会堂長は、遅きに失するという無念さと主イエスの信じなさいという言葉の狭間で、心は揺れ動いた。ペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人の弟子を連れ、会堂長の家に着いた。会堂長の娘が死んだので、悲しみを増幅させる泣き女を雇い、大騒ぎの最中だった。主イエスは、「なぜ、泣き騒ぐのか。子どもは死んだのではない。眠っているのだ」と言われた。人々は、主イエスの言葉を「分かってない」と嘲笑った。娘の父母と3人の弟子を連れ、娘のいる所に入った。そして、娘の手を取り、「タリタ、クム」、アラム語で「少女よ、さあ、起きなさい」という意味の言葉を発せられた。すると、娘はすぐに起き上がり、歩き出した。人々は、見たことのない、死から命への甦りに卒倒するほど驚いた。主イエスは、例によって口止めされ、少女に食べ物を与えるようにと命じられた。



タリタ・クム

二つの奇跡は、主イエスは人の必死の願いを顧みて、病を癒し、死から命へと蘇らせる力を持たれる神の子であるとの証言である。主イエスは、苦しむ者を癒やし、絶望の中にある者に希望を与え、生きよと言ってくださる。地面に叩きつけられても、手を取って、「タリタ、クム」と言ってくださる方が、あなたにもいてくださるというメッセージである。